



サーガ外伝
孤高のハイランダー



ジジ

孤高のハイランダー

孤独なハイランダー、今日も虚無のクリーチャーとの闘いを終え、いつもの酒場へ。

古びたカウンターの上にコインを置くと、いつものように少女が、いつもの酒を。それをぐいっ、と、いっきに飲みほす、干からびた落葉のように乾ききった心が、ほんの一瞬、波うつ。ふっ——、と、息をはく。

少女が見ている。
軽く会釈、そしてコップを置き、ハイランダーは酒場をでる。
追うように戸がひらき、少女が飛び出してくる。

「ハイランダー あなたが大好きです」、潤む少女の瞳。
「どんなに困難であろうと、たった一人で闘い続ける」
「あなたの孤高な魂は、弱いわたしに明日を信じる力を分けてくれた」
「孤高のハイランダー、あなたが大好きです」

手を胸に当て、頭を下げ、感謝の意をあらわし、そして歩き去るハイランダー。
が、止まる。

少女を振りかえり、「強さのみ追い続けるわたしは、その欲望に飲み込まれ
いつか悪霊となるかも、しれません」
「そのとき悪霊となり朽ち果てていく、わたしに、あなたのそのコトバを
いただければ、魂の封印はとかれ、わが心はあなたのもとへ」
少女に告げると、ハイランダーは歩き去る。

強さを追い求め、戦い続けるハイランダー。
クリーチャー、そして、同胞にすら容赦ない闘いを挑む。

何千もの夜の後、ハイランダーは最強と呼ばれるスペルユーザーに。

金を身にまとい足元には、悪霊に魅入られた者たちをはべらせる。
「われを讃えよ！」そう叫びながら、フィールドを徘徊する悪霊と化した、ハイランダー。
ある日一人の老婆が彼に歩み寄る。

「じゃまだ！どけ！」ハイランダーが吼える。

が、老婆は彼の目を見つめながらさらに近づく、彼が誰か確認するように。
そして、微笑む「時がきました、わたしの思いを再び伝える」老婆が静かに、
口をひらく。

「ハイランダー あなたが大好きです」

「どんなに困難であろうと、たった一人で闘い続ける」

「あなたの孤高な魂は、弱いわたしに明日を信じる力を分けてくれた」

「孤高のハイランダー、あなたが大好きです」

「あっ!」、置き忘れていたハイランダーの心もどり、その魂を呼び覚ます。
魂が脈を打ちはじめ、放たれる内からの光に、装備している悪霊の鎧が、
昇華され悪霊の呪縛から解きはなされるハイランダー。

寿命を超えていたハイランダー肉体、呪縛をとかれ不死不老の呪力を失い、
あわだち、分解しはじめる。

老婆も寿命がすぎたのか、うずくまったまま動かない、そこには生命がみえない。

朽ちてゆく二人の体から淡く輝く光がゆっくりと浮き出してくる。

「どんなに困難であろうと、たった一人で闘い続ける」

「あなたの孤高な魂は、弱いわたしに明日を信じる力を分けてくれた」

「孤高のハイランダー、あなたが大好きです」

「ありがとう、いま、わが魂はあなたのもとへ、ありがとう」